

日本基督教団  
柿ノ木坂教会

牧 師 渡邊 義彦  
協力牧師 松下 恭規

# 教会報

187号 2018年5月27日

〒152-0022

東京都目黒区柿の木坂

1-31-19

電話：03-3717-3870

Fax：03-3717-3916

## 巻頭言

### 「主によってしっかりと立ちなさい」

——フィリピの信徒への手紙第3章20節、第4章1節——

牧師 渡邊 義彦



しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。だから、わたしが愛し、慕っている兄弟たち、わたしの喜びであり、冠である愛する人たち、このように主によってしっかりと立ちなさい。

(新共同訳聖書)

神に対する人間の反抗は、御子を十字架につけるという仕方に極まります。同時に神に対して反抗して止まない人間に対する、神の愛は、イエス・キリストの十字架に頂点を迎えます。それでも、なおキリストの十字架の後の時代にあっても、イエス・キリストの十字架に敵対する者たちは絶えないのです。人は、なお神無しに生きることができる、神に憐れんでもらう必要などないと生きようとしています。人は、なお神の憐れみを拒み続け拒絶しています。キリストによる救いを拒むならば、一切の救いはありません。救いはキリストにだけあります。

キリストの救いを拒む者たちは、自分の腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていないとパウロは言います。パウロは、自分がこのように生きてきたことを語るすることができます。肉に頼り、生まれを、施された教育を、身に付けた能力を、手に入れた資格を、地位を誇る生き方をパウロは語る事ができるのです。そして、そのような者が、キリス

トを知ることのすばらしさに与り、苦しみを既に後にしていること、喜びを前に、目標に向け全身を傾けて前へ前へと進み励むことを、パウロは同時に語ることができます。

しかし、それでもなお、このすばらしさを、救いを、神の憐れみを拒み、キリストの十字架に敵対している者たちがたくさんいます。自分で生きることができる、神の助けなど必要としないと思いついてしまっている者たちが多くいます。それゆえ、世界に苦しみがあり続けます。神無しに、自分で生きることができると、十字架の救いを拒み続ける人々が、その苦しみを自覚しているかはわかりません。おそらくは、多くの人が、本当の苦しみの原因をわからずにいるか、無視するか、または、苦しんでいることそのものにも気付いていないのかもしれませんが。

キリストのすばらしさを知った者たち、洗礼の恵みによって救いに与った者たちは、この世界の苦しみに、悲惨に、無関心でいることはできません。すべての苦しみが、涙が拭かれるまでまだ時間が残されています。ときのある間に、一人でも多くの人々にわたしたちが目指しているところを伝えなくてはなりません。わたしたちが与る救いを伝えなくてはならないのです。

パウロは、不思議な言い方をします。わたしに倣う者となるように、という言葉です。彼は、誇りとしてきたものをすべて捨てたはずで

生まれも、育ちも、受けた教育も、身に付けた能力も、手に入れた資格も地位も、すべては塵あくたとなったと彼は言うことができました。わたしのすばらしさや、わたしが有能であること、立派な働きを納めていることに倣えと云うのではないことは明らかです。彼は自分を誇る生き方を捨ててしまいました。では、パウロに倣うとは、パウロのように生きている人々に目を向けるとは、いかなることでしょうか。

目標を目指して、まるでマラソンランナーがゴールを目指し、懸命に前へ前へと身体を運んでゆくように目標を目指すことが語られてありました。また、わたしたちの本国、わたしたちが目標としているところは天だと言われています。わたしたちの中には見つけることのできない、わたしたちの外にある救いを求める生き方、わたしたちを誇るのではない、神を誇り十字架に御自身を献げてまでわたしたちを救ってくださったキリストを誇る、神だけを誇り神だけを第一とする、すべてを神に望む生き方に倣うことを、パウロは言っています。

わたしたちは、まだ身体の復活を経ています。栄光の身体に復活なされたのはキリストお一人です。わたしたちは、いつも死を目前にしています。この肉の身体、土の器が、再び土に帰ることを目前としています。しかし、神は、キリストのゆえに、わたしたちを復活させてくださり、キリストがすでに生きておられる栄光の身体と同じ形にしてくださいます。わたしたちの国籍が天にあるので、終わりの日には、キリストと同じ栄光の身体にわたしたちは化せられ、この国の民であることがまことに明らかになるのです。

今、わたしたちは、この復活に至る救いを、信仰によって信じています。肉の身体、土の器は再び土に帰ります。しかし、聖霊を受けて霊において解放された者たちは、天上の自分たちの姿を思い描くことができます。肉の身体、この世の在り方にとらわれている窮屈な生き方から、パウロはキリストの霊によって生きる自由に解放されました。この世のことに捕らえられ

ている窮屈な不自由な生き方から確かに世界はまだ自由になっていません。悲しみがあり、苦しみがあり、うめきがあり、涙があり、なお、世界は悲惨であり続けます。争いがあり、憎しみあいがあり、戦いがあり続けます。だから、なお伝道の余地が残されており、福音を必要とする人々がなお居続けています。わたしたちの本当の国籍を故郷を知りたがっている人たちがまだいます。そうであるので、キリストの十字架を、キリストがわたしたちのために御苦しみを負ってくださったことを世界に伝えなくてはなりません。

わたしたちの地上の人生、地上の年月、地上の旅路は天の本国への帰還を目指した旅です。目標も定かでなく、目当てなく彷徨い歩く旅路ではありません。確かな目標と目的に到達することを目指す旅路にあります。旅の終わりに待っていてくださるのはキリストです。わたしたちの救いであるお方です。

キリストによって、使徒パウロはこの確かなゴールを知らされたので、このゴールに自分の力で到達するのではないことを知ったので、兄弟、姉妹を励ますことができます。

「だから、わたしが愛し、慕っている兄弟たち、わたしの喜びであり、冠である愛する人たち、このように主によってしっかりと立ちなさい。」

### 集会出席統計（月平均人数）

	2018年	
	3月	4月
主日礼拝	89.5	92.6
聖書と祈り会	17.0	14.3
教会学校*	103.0	123.2
* 保護者、教師を含む		
(第1主日開催)	3月4日	4月1日
聖餐夕礼拝	10	9

「聖句三題 ～ 鷺と兄弟とエマオへの道」

石丸 昌彦

好きな聖句を挙げていくときりがなく、しまいには聖書全巻を引用することになりそうです。そこはぐっとこらえ、旧約から二カ所、新約から一カ所選んでみました。いずれも私的な思い出があるとともに、皆で分かち合いたい言葉でもあります。対応する讚美歌とあわせて振り返ってみます。

\*\*\*

「主に望みをおく人は新たな力を得、鷺のように翼を張って上る。走っても弱ることなく、歩いても疲れぬ」（イザヤ書 40:31）

東北から九州へ転勤することになった時、あるクリスチャンの同僚がこの言葉を贈ってくれました。嬉しくはありましたが、ケガをして大きな手術を受けた直後でもあり、やや気もちの萎えていた当時の私には眩しすぎるものでした。

力強く希望に満ちた一節であり、それだけに現実とはかけ離れているようにも思われます。走っては転び、歩いては疲れるのが生身の人間、「弱りもせず疲れもしない」ことを願いながら、そうはいかないのが人生なのにと、少々恨めしい気もちだったでしょうか。

けれどもある時、ふと気がつきました。「鷺のように翼を張って昇る」とある、その鷺は空の高みへどのように昇っていくのでしょうか？小鳥のようにパタパタ羽ばたいたりはしません。大きく広げた翼をほとんど動かすことなく、風に乗って昇っていくのです。

そもそも鷺は、切り立った崖の高いところなどに好んで巣をかけます。そして巣から飛び立つと同時に、崖に沿って吹き上げる上昇気流にふわりと乗ってみるみる舞い上がっていきます。だから鷺は羽ばたかない、ただ、吹き上げる風の力を漏らさないよう羽をぴたり閉ざしています。昇っていく力は鷺が作り出すので

なく、風が生み出すものなのでした。

イザヤの名で呼ばれる預言者は、そのことをよく知っていたに違いありません。風とは言うまでもなく聖霊のこと、自力で歩むことに疲れ果てた人も、無限の力の源である神の霊に運ばれるなら、小さな自分の限界を超えてどこまでも昇っていくことができるのです。そう気づいて、言葉を贈ってくれた人へ感謝の思いを新たにしたことでした。

この言葉は、とりわけ各種の奉仕にあたる人々に贈りたいものです。善意から出発した行いであっても、自力に頼っていたら必ず疲労困憊する時が来るでしょう。聖霊の風に身を委ねて押し上げられていく、信仰者ならではの樂觀性を身につけたいものです。

\*\*\*

「みよ、兄弟が共に座っている。なんとという恵み、なんとという喜び。」（詩篇 133）

美しい風景です。もちろん、ここに詠われている兄弟とは血縁に限ったものではなく、主にある兄弟姉妹のことでしょう。私たちは礼拝のためにも祈るためにも共に座りますが、とりわけ主の食卓に付くために共に座ります。座るといふ行為は他の何にもまして、飲食を共にする際にふさわしいものです。「同じ釜の飯を食う」ことを通して、兄弟の絆はいつそう深く親しくなります。

ただ、この聖句を味わうにあたっての注意事項を、ある牧師さんが書いておられました。

「兄弟とは、お互いに仲良しで意見や考えが一致している者だけを指すのではない。教会の中にも考えの違いがあり、気の合うものと合わないものがある。健康な者もあれば障害のある者もある。私が好きになれない相手があり、私を好きではない人がいる。それが兄弟姉妹の現実であり、そのような兄弟姉妹が主に招かれて

共に座っているのが、恵みであり喜びであるということなのだ。」

大略そんな内容だったと思います。

そう言えば、ずっと以前に柿ノ木坂の特別伝道礼拝に来てくださった佐古純一郎先生が「あなたの隣人を愛せよ」という聖句を主題とし、「あなたの隣人とは誰ですか？」というタイトルで話されました。

「自分の好きな気の合う相手ばかりが隣人なのではない、腹の立つ、いまましい、癩にさわる、大嫌いな人間を思い浮かべなさい。その人こそ、あなたが愛さねばならない隣人なのだ。」

お話し上手の佐古先生は茶目っ気たっぷりに私たちを見回しながら、「あなたの隣人とは誰ですか？」と繰り返されたものでした。

この詩編 133 を歌詞とするのが、讃美歌 21 の 162 曲です。素朴に胸に沁みるもので、愛餐の集いなどにうってつけではないでしょうか。

\*\*\*

「話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。」(ルカによる福音書 24 章 15 節)

この一節をもって、同福音書 24 章 13-27 節全体の引用に代えます。有名な、エマオ途上の主イエスの復活顕現です。

受洗の日に礼拝で読まれた箇所として懐かしい箇所ですが、読み返すにつれ不思議が募ります。何もかも御存じの張本人であるイエス御自身が、素知らぬ顔で「その話は何のことですか」と尋ね、弟子たちもまた相手が誰だか気づきもせず一部始終を語るというのです。聖なるユーモアとでも呼びたい精妙な構図です。

続いて弟子たちがぐどくどと訴える長い話を、これまた全て承知のうえでじっと聞きながら並んで歩かれる主の姿が、ユーモラスであるとともに感動的です。昨今さまざまな面で重視される「傾聴」という作業の、究極の実践例ではないでしょうか。

その後、精神科医として働く中で、この場面の主イエスの姿は私の理想像になりました。聖

書とりわけ福音書の中には他にも多くの実践的なヒントが隠れており、それを拾い出すのが楽しみにもなりました。まことに神の言葉は奥深く幅広いものです。

エマオに関する歌としては、讃美歌 21 の 218 曲「日暮れてやみはせまり」が真っ先に思い出されます。慰めに満ちた歌詞とメロディが私も大好きです。(実際に口ずさむのは「日くれて四方はくらく」、54 年版 39 番の歌詞ですけれど。) 作詩にまつわる印象的な逸話を、かつて井澤浩一兄が礼拝後に御紹介くださったと記憶します。



もう一つ、讃美歌 21

の 334 曲「よみがえりの日に」が最近の私たちの礼拝で歌われ、曲に乗せてエマオの出来事を忠実にたどることができました。ただ残念なことに、締めくくりの 6 節の「現場にかえり」が曲想を台無しにしています。語の響きと言い、連想される用法と言い、「ゲンバ」では全くゲンナリです。英語の原詞を見ると「現場」と訳したくなるのも分からないではないのですが、そこは頑張っってひと工夫ほしかった。

翻訳はどこまで行っても難しいものです。それだけに讃美歌はともかく、聖書は原語で読みたいものと、30 年来の見果てぬ夢を今なお見続けているのでした。

井澤浩一付記: 毎月の最終主日礼拝後に行っている讃美歌練習。石丸兄がその一つを覚えておられたことに感激です。「日くれて・」の作詞者イングランド国教会のライト司祭が人生の夕暮れを覚えつつ「告別説教」をされた夜、書かれたというエピソードだったと思います。作曲者モンクも荘厳な日没を目にして作曲したといわれています。

上の写真は井澤が西伊豆で海に沈む夕陽に感動しつつ撮ったものです。

白黒の教会報ではわかりませんが、HP 掲載の教会報はカラーですのでご覧になってみてください。

☆☆☆ 教会の行事 ☆☆☆

2018年 6月 柿ノ木坂教会 伝道月間

わたしたちの教会では6月伝道月間に、毎日曜日、特別伝道礼拝を献げます。  
日曜ごと、礼拝のため立てられる説教者たちが、祈りをもって聖書の御言葉を取り次ぎ語ります。  
キリスト教、教会に関心のある方、はじめてでありましてもご出席くださり、ぜひ礼拝をご一緒ください。

6/3 (日)  
AM 10:30~



説教「神は生きておられます」

日本基督教団  
柿ノ木坂教会牧師

渡邊 義彦 牧師

6/10 (日)  
AM 10:30~



説教「神との出会い」

青山学院宗教学部長  
大学宗教学主任

大島 力 牧師

6/17 (日)  
AM 10:30~



説教「わたしを支えるもの」

日本基督教団  
目黒原町教会牧師

大塚 啓子 牧師

6/24 (日)  
AM 10:30~



説教「主イエスの家族とは」

日本基督教団  
柿ノ木坂教会協力牧師

松下 恭規 牧師

日本基督教団 柿ノ木坂教会

お知らせ：ホームページ掲載の教会報は、執筆者の希望で、該当ページを削除してあります。  
また写真等は個人情報保護のため、ぼかしをかけてある場合もあります。

## 今月のメッセージ

— ホームページ巻頭言 —

ホームページには多くの情報が掲載されています。

ぜひご覧ください

<http://kakinokizaka-church.com>

ある人がぶどう園にいちじくの木を植えておき、実を探しに来たが見つからなかった。そこで、園丁に言った。「もう三年もの間、このいちじくの木に実を探しに来ているのに、見つけたためしがない。だから切り倒せ。なぜ、土地をふさがせておくのか。」園丁は答えた。「ご主人様、今年もこのままにしておいてください。木の回りを掘って、肥やしをやってみます。」

(新共同訳聖書・ルカによる福音書第13章6～8節)

春になっても家内が落ち葉掃きをしています。秋ではないのにです。幼稚園の園庭にあるどんぐりの木、クヌギの落ち葉です。このクヌギは落葉樹広葉樹ですから、他の木と同じように秋になると葉は枯れて茶色になります。しかし、冬の間どんなに強い風が吹こうともこの枯れた葉を落しません。茶色の葉をまとったまま春を迎えます。すると春も大分深まったある日、一斉に葉を落したかと思うと、見る見るうちに新しい淡い緑の若葉をまさに萌え出すのです。茶色に枯れてしまった葉のすぐ下に若々しい緑の葉を蓄え育てて冬を過ごし、そして春を迎えるのです。

落葉樹の葉が落ちるのは秋だと思い込んでいただけに驚きました。同じ仲間の木は公園や野山にももちろんあるでしょうから、このような木の葉の落ち方に気づけなかったのは観察不足、認識不足でした。牧師室から正面にこの木が見えるので定点観測をしてはじめて、春に葉を落す木があることを知った次第です。春になってそろそろ若葉が出てもいい頃になっても枯

れ葉を付けている木だったので、立ち枯れしているのかと思って、幼稚園教師にあの木は切ってしまうと言いましたら、春に落葉するのだと教えてくれたのです。

この木の世代交代は見事です。茶色の葉は次の若葉が育つまで寒い冬の間もその若芽を守り育てます。そして回りが暖かくなり若芽が十分に育つことができるようになると枯れ葉を落します。野山の自然の中では、もちろん落ち葉掃きなどしませんから、落ちた葉は再び土に還り、木を支え育てます。

わたしたちは、生活のさまざまな場面で世代交代を経験します。緩やかな交代もあれば、急激な変化もあります。世代と世代の間が空いてしまうこともあります。しかし、それが如何にあっても、命をつなげてくださるのは主なる神であることを、わたしたちは聖書から教えられています。与えられた馳せ場を歩み通すようにとわたしたちを召してくださるのも、主なる神であることを教えられています。そうであるので、交代がいつ来てもよいようにわたしたちは備えていたいのですし、一つでも先に歩を進めたいと願うのです。

使徒パウロは言いました。

後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。(フィリピの信徒への手紙第4章13～14節)

主にあって、そのような幸いに生きてゆきたい、そう願います。(牧師 渡邊 義彦)

### —— 編集後記 ——

- ・4月1日に転入会されたお二人の姉妹から自己紹介の原稿を頂きました。主の教会に仕える者として共に歩んで参りましょう。
- ・来週から迎える6月は伝道月間。多くの方々をお誘いしたいものです。
- ・「翼を張って上る鷺」の画像が欲しいとおっしゃっていた筆者。画像は見つけましたが、著作権がありそう。代わりに讚美歌にまつわるエピソードに合わせ沈む夕陽を入れました。
- ・教会報へのご意見、ご感想をお寄せください。  
(編集委員長 井澤浩一)

### 集会案内

主日礼拝 日曜日 午前10時30分  
聖餐夕礼拝 第1日曜日 午後5時  
入門講座 日曜日 午前9時30分  
教会学校 日曜日 午前9時  
(幼稚科、小学科、ジュニアチャーチ)  
\*ジュニアチャーチは中学生、高校生です。  
聖書と祈り会 水曜日午前10時、午後7時30分  
日本基督教団 柿ノ木坂教会  
〒152-0022 東京都目黒区柿ノ木坂 1-31-19  
電話 03-3717-3870 (教会・牧師館)  
03-3723-3870 (ベテル幼稚園)  
牧師 渡邊 義彦  
協力牧師 松下 恭規